



プログラムコーディネーター  
**大方 潤一郎**  
 大学院工学系研究科  
 都市工学専攻 教授/  
 高齢社会総合研究機構 機構長

複合領域型—横断的テーマ— 採択年度:平成25年 T01

# 活力ある超高齢社会を共創する グローバル・リーダー養成プログラム

Graduate Program in Gerontology : Global Leadership Initiative for an Age-Friendly Society (GLAFS)

分野横断的俯瞰力・構想力・実践力を備えた高度専門家チームによる社会のリデザインをめざす



お問い合わせ先: 03-5841-1662 ホームページ: <http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp/>

## 俯瞰力+専門的研究能力 +実践的課題解決能力

本プログラムでは、本学9研究科28専攻・1機構の教員や連携企業・自治体および海外の大学等のサポートの下で、選り抜かれた大学院生が、①高齢社会問題に関する講義を通じ高齢社会問題に関する俯瞰的総合的な知識を獲得し、②多様な分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組むフィールド演習や、国際的チームワーク力を育成するグローバル演習によって、現実社会における課題解決能力を養い、③高齢社会の実態や真のニーズを反映した独創的で質の高い博士研究を成し遂げることを通じ、《活力ある超高齢社会を共創するための能力》すなわち(自身の専門分野に関する専門的学術研究能力)、(高齢社会問題に関する幅広い俯瞰力)、(多分野の専門家チームを主導して問題解決に取り組む実践的課題解決能力)の3つの能力を兼ね備えた、グローバルなリーダーシップを発揮できる人材を養成します。

## 東京大学の総力をあげて 超高齢社会問題に取り組む

日本は、2030年には人口の1/3が65歳以上の「高齢者」、1/5が75歳以上の「後期高齢者」という、超高齢社会になることが予想されています。また、韓国やシンガポールも2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国も2060年には高齢者人口が1/3に達することが予測されています。こうした超高齢社会は、世界の歴史に先例の



9研究科による分野横断型のプログラム

ない未知の領域です。高齢化最先進国としての日本には、世界に先駆けて、活力ある超高齢社会のあり方を構想し実現する責務があるといえます。

本プログラムは、人生90年時代において、高齢者が活力を持って地域社会の中で生活できる期間をより長く、要介護期間や施設収容の期間を最小化することを通じて、高齢者自身のQOL(生活の質)を高めると同時に、家族と社会の負担を軽減し、高齢者と社会の活力を維持向上するため、世界に先行するジェロントロジー教育研究の拠点である東京大学・高齢社会総合研究機構を中核に、東京大学の人文社会科学、教育学、法学政治学、総合文化学、工学、農学、医学、新領域創成科学、情報理工学の9研究科28専攻の総力を結集し、修士博士一貫の博士課程による教育を通じて、活力ある超高齢社会を共創するグローバルリーダーの養成に取り組むものです。

## 社会全体の生活環境基盤を 総合的にリデザインする

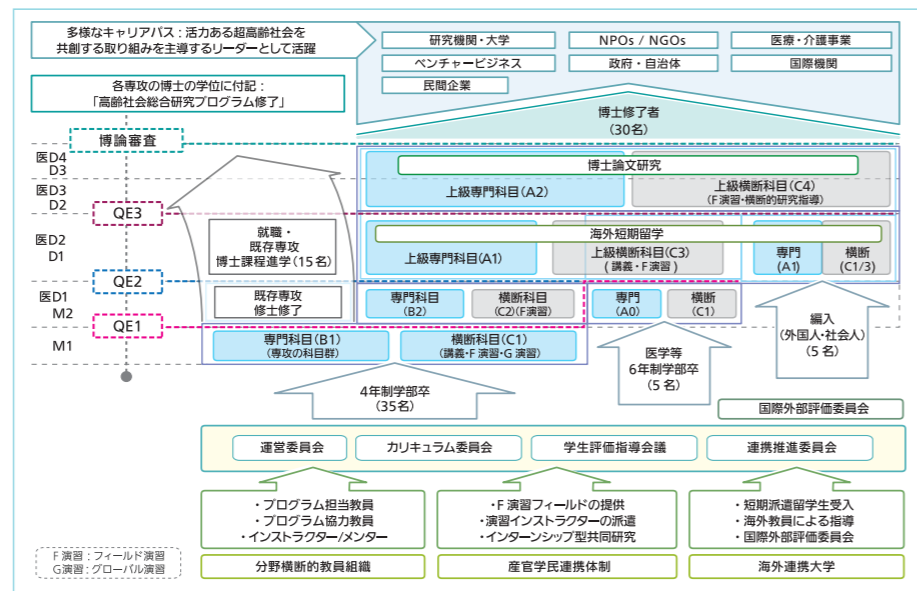
超高齢社会に対応するためには、都市や地域での市民生活を支える生活環境基盤の3領域、すなわち、①【い:医】ケア・サ



夏季合宿: 学外教員や行政、企業の方とワークショップ

ポート・システム(医療・看護・介護・みまもり・保育・子育て・福祉等の統合的システム)、②【し:く:食:職】社会的サポート・システム(社会的包摂・社会参加・コミュニティ活動等の促進体制)、③【じ:う:住】物的空間的生活環境システム(居住環境・歩行環境・交通環境・街並環境・商業環境・コミュニティ交流施設・オープンスペース)をリデザインし組み替えていく必要があります。こうした新しい超高齢社会の社会システムを構想し実現する取り組みを世界各地の現場で主導する高度な人材を養成することが、本プログラムの目的です。

### プログラムの構成・概要



DATA (2014年12月1日現在)

- 【学生募集人数】35~40名/年
- 【現在の学生数】36名
- 【修了者見込み数】10名~30名/年
- 【プログラム担当者数】61名
- 東京大学42名、海外大学5名、国内他大学3名、医療機関2名、社会福祉法人2名、企業7名
- 【参画研究科・専攻等】9研究科・28専攻・1機構(高齢社会総合研究機構)(工学系研究科)社会基盤学専攻、建築学専攻、都市工学専攻、機械工学専攻、精密工学専攻、化学システム工学専攻、先端学際工学専攻(人文社会系研究科)社会文化研究専攻(教育学研究科)総合教育科学専攻、学校教育高度化専攻(法学政治学研究科)総合法政専攻(総合文化研究科)広域科学専攻(農学生命科

- 学研究科)生産・環境生物学専攻、応用生命科学専攻、水圏生物学専攻、農業・資源経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、獣医学専攻(医学系研究科)社会医学専攻、生殖・発達・加齢医学専攻、外科学専攻、健康科学・看護学専攻(新領域創成科学研究科)先端エネルギー工学専攻、メディカルゲノム専攻(2015年度よりメディカル情報生命専攻)、人間環境学専攻、社会文化環境学専攻(情報理工学系研究科)知能機械情報学専攻
- 【国内外連携・協力大学等】5機関
- ミシガン大学ジェロントロジー研究機構/オックスフォード大学高齢社会研究所/ミズーリ大学法科大学院/シンガポール国立大学医学大学院/ソ

- ウル大学ジェロントロジー・トランスレーショナル研究センター
- 【連携・協力企業等】5機関
- セコム/ニッセイ基礎研究所/大和ハウス工業/ベネッセスタイルケア/ユーディット
- 【新雇用教員・スタッフ】24名
- 特任助教15名、スタッフ9名
- 【特記事項】
- 修了者には所属研究科が授ける博士学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」を付記
- 分野横断的チーム・地域連携/社会連携で取り組むコミュニティ環境改善プロジェクト演習

## CLOSE UP 1

### 「広い視野を持った」「現場を知る」リーダーを育成

共同研究では分野横断チームを組み、現場に出かけていくことで、実践的課題解決能力を養います。

フィールド演習の一環として、地域連携型グループ共同研究があります。「住まいとコミュニティ」「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」「食と栄養」など、テーマは多岐にわたり、それぞれに分野横断的チームを組み、実際に現場に出かけフィールドワークを行っています。例えば「高齢期の農ある暮らし」共同研究では菜園付きコーポラティブ住宅を

訪ね、住民にインタビューを行いました。この後もグループは数か所で調査。成果は年度末に発表されます。

異なったバックグラウンドの学生が協働することにより、専門以外の知識が共有される。現場に出かけていくことで、ニーズを肌で感じとる。「広い視野を持った」「現場を知る」リーダーはここから生まれます。



聞き取り調査をする「農ある暮らし」のメンバー

## CLOSE UP 2

### 机上の空論ではないアクションリサーチが展開できるプログラム

東京のベッドタウンから被災地まで、多様なフィールドで生の声に触れることができます。

フィールド演習では共同研究の他にも千葉県柏市で地域の単身高齢者約200名が集うイベントに参加したり、東日本大震災の被災者が暮らす若手県大槌町の仮設住宅団地で住民の体力測定・まちづくりワークショップを行ったりしています。コース生のひとり、松本博成さん(医学系研究科健康科学・看護学専攻修士1年)によると、「家族やクライアント(患者)として

ではなく、同じ社会に生きる住民としての高齢者や関係機関スタッフに、メディアを介さず接することのできる貴重な機会。真摯に耳を傾けることで、コミュニティにとって本当に必要なものを明らかにし、何度も話しあうことで、机上の空論ではないアクションリサーチが展開できると考えています」。GLAFSでは学生も教員もとにかく現場、フィールドに足を運びます。



柏市でのイベントでは率先して単身高齢者の中へ

## VOICE

**黄 銀智**  
 人文社会系研究科 博士1年

**小嶋 泰平**  
 情報理工学系研究科 修士1年

**吉田 真悟**  
 農学生命科学研究科 修士1年

### 国際交流を通じた 更なる大きな問題解決へ

元々韓国からの留学生ではありますが、GLAFSに参加してからデンマークで行われたIARUの国際会議での研究発表や、富山市で行われたOECDの国際会議にも参加させて頂くなど貴重な機会に恵まれました。GLAFSには多分野の学生が集まっており、もちろん留学生は少数ではありますが、海外の制度の研究をしている立場からの話題提供のみならず、国際交流の意義や楽しさをもっと身近で伝えられる役割を果たすことができると考えています。

### 分野横断型プログラムの強み

本プログラムには多種多様なバックグラウンドを持つ教員・学生が集まっています。私は情報理工学系の院生として最新デバイスを用いた人間の身体運動に関する研究を進めています。分野横断型のプログラムとして医学系の方々などから意見を頂けることが大きな助けとなっています。また実際にフィールドに出て高齢者と触れ合う機会もあり、その中でシステムを実践することでより実用的なフィードバックを得られることもこのプログラムの強みだと感じています。

### 「現場」と「学生」をつなぐ 魅力ある組織として更なる発展を

私がGLAFSを選んだ最大の理由は「現場とのつながり」です。GLAFSの持つ地域社会や産業界とのつながりと、「現場」を目指し集まった各分野の学生との共同研究は、自身の社会人経験を研究に活かす場として魅力的です。実際に、研究を社会の問題と結びつける力が活動を通じて身につく過程を実感しています。各学生が活躍できる「現場」とのつながりを創れる組織としてのGLAFSのさらなる発展を期待し、私自身も積極的な社会参加を通じて活動に貢献していきます。